

生誕100年 山下清 展 百年目の大回想

2023.6/24.sat.

▶▶▶ 9/10.sun.

100th Anniversary of the Birth of

**YAMASHITA**

**KIYOSHI,**

a Retrospective





## ごあいさつ

山下清(1922-1971(大正11-昭和46)年)は放浪の天才画家として知られており、懐かしい日本の原風景や名所を貼絵で表し、多くの人々の心を捉えました。生誕100年を記念する本展では、代表的な貼絵の作品に加えて、子供時代の鉛筆画や後年の油彩、陶磁器、ペン画などを展示し、山下清の生涯と画業をご紹介します。

日本各地を自由気ままに旅する生活を好んだ清は、驚異的な記憶力をもち、スケッチやメモを取らずとも、旅先で見た風景を細部まで正確に思い出すことができました。ときおり旅から戻ると、高い集中力を発揮して、手で細かくちぎった紙片を緻密に貼り合わせることで、超絶技巧的とも言える貼絵を制作しました。そこに見られる丁寧な細部描写と豊かな色調という魅力は、油彩やペン画、水彩画など他の作品にもよく表れています。このような多彩な作品約190点、そして旅に持参したリュックや浴衣、所蔵していた画集などの関連資料を間近に鑑賞することで、49歳で逝去するまで個性的な創作活動を続けた山下清の世界をご堪能いただければ幸いです。

みどころ **1**

### 山下清の生誕100年を記念する大回顧展

昭和の時代に「日本のゴッホ」とも呼ばれた放浪の天才画家、山下清の画業と人生を振り返る大規模な展覧会です。

みどころ **2**

### 芸術家、山下清の真の姿に迫る

気ままな旅に持参したリュックや着ていた浴衣などの関連資料と併せて、緻密で繊細な表現、そして職人技といえる高い技術を示す貼絵など約190点の作品によって、その人物像と制作活動をご紹介します。

みどころ **3**

### 旅の風景を鋭い観察眼で捉えた山下清の世界

驚異的な記憶力と集中力を併せもつ清は、旅先で見た風景を細部まで正確に思い出し、手で細かくちぎった紙片を緻密に貼り合わせることで、超絶技巧的な貼絵を生み出しました。手の込んだ細部描写と豊かな色調を特徴とする山下清の世界をご堪能ください。





# Profile of KIYOSHI YAMASHITA

1922(大正11)年に東京、浅草で生まれた清は、吃音と発達障害のために周囲になじむことが難しく、独りで昆虫を採り、絵を描くことを好む少年だった。12歳の時に千葉県やわたの養護施設「八幡学園」に入園すると、授業の一環として行われていた「ちぎり絵」に取り組んだ。ちぎった紙片を台紙に貼り付ける「ちぎり絵」の手法を基に、清はちぎった色紙の切り口を巧みに使って微妙な色の階調を出し、こより状の紙片で細部を表すなどの工夫を凝らして独自の「貼絵」の技術を磨いていった。

1937(昭和12)年から数回に渡り、八幡学園の子どもたちの作品展が東京で開催されると、とりわけ清の貼絵は注目を集めた。当時、美術界の重鎮だった洋画家、安井曾太郎や梅原龍三郎らがその貼絵を高く評価する一方で、弱冠17歳の山下清の天才性とその作品を巡って議論が巻き起こった。

そのような反響の一方で、清は学園生活に飽きると同時に、近づく戦争のための徴兵検査を免れたいという思いもあり、八幡学園を出奔して旅に出た。こうして、18歳から32歳までの15年間に渡って続く放浪生活が始まった。家々を訪ねて食べ物を乞い、駅舎の待合室で眠るという生活は時として過酷なものだったが、何物にも縛られない自由を選んだのである。時折、ふと自宅や八幡学園に戻ると、驚異的な記憶力によって心に留めた旅先の風景を貼絵で表し、しばらくすると再び放浪に出た。

31歳の時、新聞記事に取り上げられた清は一躍有名人となり、それによって気ままな放浪が難しくなったことから、画家として身を立てよう決心した。貼絵のほかに、ペンや油彩の使用、陶磁器の絵付けなどを周囲から勧められると、試行錯誤しながら独自の表現を探っていった。49歳の若さで亡くなるまでの間に、繊細かつ丁寧に制作された多彩な作品群は、今日でも多くの人々を魅了している。

## 1 山下清の誕生

### 一昆虫そして絵との出会い

1922(大正11)年に東京、浅草に生まれた清は、3歳の時に高熱を伴う重い消化不良を患い、後遺症と思われる吃音が残った。小学校では吃音のためにイジメられ、独りで昆虫を採り、絵を描くことに楽しみを見出した。9歳の時に父が他界して母子家庭となり、清は母の旧姓「山下」を名乗るようになった。次第に清の発達障害が目にとまるようになり、周囲からのイジメが増したため、千葉県にある養護施設やわた「八幡学園」に入園した。ここで生活する中で、清は画家としての才能を開花させることになる。



左▶ 広報用貸出画像 1 《ほたる》1934(昭和9)年、貼絵、12×17.5cm、山下清作品管理事務所蔵

右▶ 広報用貸出画像 2 《蝶々》1934(昭和9)年、貼絵、12×17cm、山下清作品管理事務所蔵

フランスで学び、独自の作風で評価された洋画壇の重鎮、安井曾太郎は、少年時代の山下清の作品を次のように賞賛している。「……実に美しい貼紙絵に驚き感心して、僕はすっかり貼紙絵信者になってしまった。(中略) 今後はどうなるか楽しみでもあり、不安でもある。」

(安井曾太郎「特異児童の作品を選定して」大下正男編「特異児童作品集」春鳥会、1939年、4ページ。旧漢字、旧仮名遣いは現代表現に改めた。)



# 第2章

## 学園生活と放浪への旅立ち

八幡学園の授業で「ちぎり絵」に出合ったことは、清にとって大きな転機となった。清は、色紙をより細かくちぎって貼り合わせるテクニックを磨き、独自の「貼絵」の手法を確立した。一方で、学園での生活に飽きた清は、1940（昭和15）年、突然出奔して放浪を始めた。その後10年以上に渡って日本各地を巡る中で、ときおり自宅や学園に戻っては、驚異的な記憶力を頼りに、旅先で見た風景を貼絵で表現した。1954（昭和29）年、清は放浪の画家として新聞記事で大きく報道され、広く知られるようになったため、自由気ままに旅することが難しくなり、制作活動に専念するようになった。



- 上 ▶ 広報用貸出画像 3 《ともだち》1938(昭和13)年、貼絵、24×33cm、山下清作品管理事務所蔵
- 下・左 ▶ 広報用貸出画像 4 《高射砲》1938(昭和13)年、貼絵、58×76cm、山下清作品管理事務所蔵
- 下・右 ▶ 広報用貸出画像 5 《桜島》1954(昭和29)年、貼絵、54×76.5cm、山下清作品管理事務所蔵

1951（昭和26）年、群馬県高崎市にある新町駅の待合室で花火大会の張り紙を見て、見物に行った。「花火のあがる時には、はじめ火の玉が一つ高くあがって、それが破裂すると火が花のように開くので、火で出来てる花だから花火と云うので、みていると美しくて面白い。」

（池内紀編『山下清の放浪日記—池内紀のちいさな図書館』五月書房、1996年、194ページ）

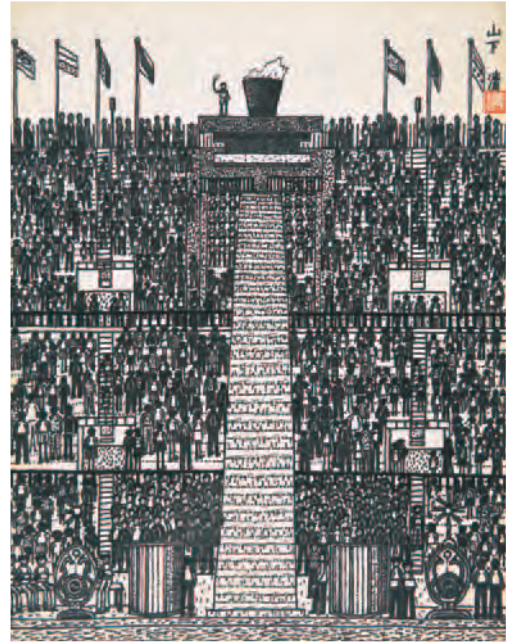


# 第3章

## 画家・山下清のはじまり

### —多彩な芸術への試み

1956(昭和31)年、一躍有名となった清の展覧会が東京、大丸百貨店で開催されると、26日間で約80万人が来場するという盛況ぶりとなった。その後も全国各地で展覧会が開催され、その好評に伴って、テレビや雑誌の取材が増えると、その話の内容や独特の話し方にも注目が集まり、人気となった。この頃からペン画を多く制作するようになり、展覧会開催に併せて訪れた土地で、風景や季節の行事を題材にした作品を残している。数は少ないものの、油彩にも着手し、点描のような独特な表現を試みた。



左 ▶ 広報用貸出画像 6 《ぼけ》1951(昭和26)年、油彩、58×44cm、山下清作品管理事務所蔵

右・上 ▶ 広報用貸出画像 7 《東京オリンピック》1964(昭和39)年、ペン画、38.5×30cm、山下清作品管理事務所蔵

右・下 ▶ 広報用貸出画像 8 《ソニコンロケット》1959(昭和34)年頃、貼絵、44×36cm、株式会社増田屋コーポレーション蔵

各地の展覧会場で開催される山下清のサイン会は好評を呼んだ。「……いつもいっぱいの人です。どうしてサインをすると、あんなによろこぶのか、ぼくにはわかりません。(中略)サインをしてもらったものは、どこへどうしてしまっておくのか。それをときどきだしてながめて面白がっているのか、忘れてしまうのか……」

(山下清『日本ぶらりぶらり』ちくま文庫、1998年、189-191ページ(初版は文藝春秋新社、1958年、ここでは文庫版からの引用))



# 第4章

## ヨーロッパにて —清がみた風景

外国に行くことを強く希望した清は、1961（昭和36）年、39歳の時にヨーロッパを中心とする12ヶ国を約40日間で巡る取材旅行に飛び立った。かつての放浪とは異なり、画家としてスケッチブックを持参した清は、各地の風景をスケッチに描き、帰国後、本格的な制作に取り組んだ。この旅行を題材とする貼絵やペン画は、さらに緻密さを増し、街並みや建築はより写実的に捉えられている。とくに細かい紙片やこよりを用いた貼絵は、技術と表現の両面で大きな進展を見せており、清の画業の中でも際立った作品群である。



- 上・左▶ 広報用貸出画像 9 《パリのサクレール寺院》1962（昭和37）年、貼絵、45.5×53cm、山下清作品管理事務所蔵
- 上・右▶ 広報用貸出画像 10 《パリのエッフェル塔》1961（昭和36）年、水彩画、73.5×54cm、山下清作品管理事務所蔵
- 下・左▶ 広報用貸出画像 11 《スイスの町》1963（昭和38）年、貼絵、46×53.5cm、山下清作品管理事務所蔵
- 下・右▶ 広報用貸出画像 12 《ロンドンのタワーブリッジ》1965（昭和40）年、貼絵、44×52cm、山下清作品管理事務所蔵

「スイスは世界で一番いい時計のできる国で、チューリッヒにも時計屋がたくさんある。ある時計屋のショーウィンドウに金魚ばちが置いてあって、そのなかに金魚と腕時計が置いてあったので『先生、スイスの金魚は時間かわかるのか』ときくと、『あれはどんなことをしても水の入らない腕時計の広告だよ』」

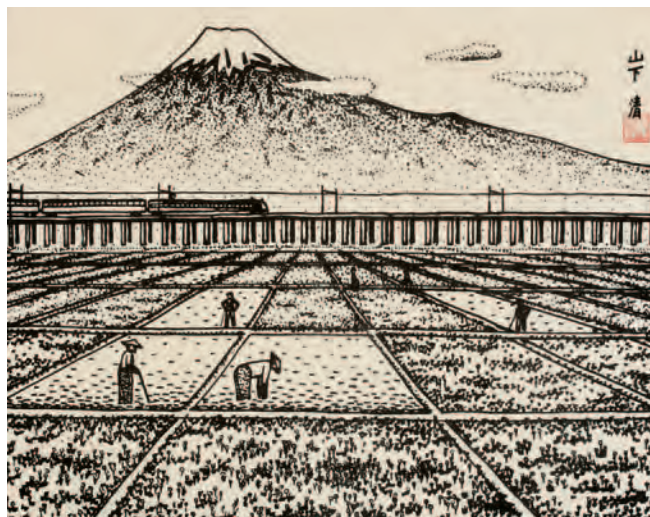
（山下清『ヨーロッパぶらりぶらり』ちくま文庫、1994年、202ページ（初版は文藝春秋新社、1961年、ここでは文庫版からの引用））



# 第5章

## 円熟期の創作活動

1956(昭和31)年以降、清は日本各地で展覧会が開催される際、その土地の窯元を訪ねて陶磁器の絵付けを行った。この頃には、目の不調のために細かい作業を要する貼絵制作を控え、ペン画など他の手法の作品を多く手がけた。さらに、清は新たなテーマとして「東海道五十三次」を選び、約4年間の取材を経て、ペン画に着手した。しかし眼底出血により作業中断を余儀なくされ、約2年後の1971(昭和46)年に脳溢血により逝去。没後、療養中も密かに制作を続け、「東海道五十三次」全55点のペン画を完成させていたことが判明した。ペン画は散逸したが、それを基にした版画により、その全体像は今に伝えられている。



左▶ 広報用貸出画像 13 《長岡の花火(有田焼)》1957(昭和32)年、色絵大皿、直径50.8cm、株式会社増田蔵

右▶ 広報用貸出画像 14 《東海道五十三次・富士(吉原)》制作年不詳、版画、27×35cm、山下清作品管理事務所蔵

富士山を何度も描いた山下清は、若い時に登ろうとしたこともあるが、途中であきらめた。引き返すときに出会った登山者に「富士山の頂上迄登ろうと思っても途中で疲れたから、帰って来ちゃった」と話すと、「何だ、意気地がないな」と言われ、ふもとで出会った人にも同じことを言われたという。

(池内紀編『山下清の放浪日記—池内紀のちいさな図書館』五月書房、1996年、134-141ページ)

### 略年表

1922(大正11)年	3月10日、東京市浅草区田中町(現在の台東区日本堤)に父、大橋清治と母、ふじの長男として生まれる。
1923(大正12)年	関東大震災で自宅が焼失。
1924(大正13)年	両親の故郷である新潟に家族とともに移る(数年後に東京、浅草に戻る)。
1925(大正14)年	重い消化不良を患い、高熱が続く。3ヶ月後に完治するが、軽い言語障害が残る。
1932(昭和7)年	父、死去。この頃から発達障害が次第に顕著になり、周囲の子どもたちからのイジメに遭う。
1934(昭和9)年	再婚相手と別れた母(旧姓、山下)とともに母子家庭向け社会福祉施設「隣保館」に入った。清も山下姓を名乗る。小学校に馴染めず、千葉県にある養護施設「八幡学園」に入園。授業で行われていた「ちぎり絵」を元に、独自の手法による「貼絵」を生み出していく。
1940(昭和15)年	学園を抜け出し、以後、約15年間にわたって日本各地を放浪した。ときおり自宅や八幡学園に戻ると、放浪中に見た風景や経験した出来事を思い出して、貼絵を制作し、日記を書き綴るが、しばらくすると再び放浪に出ていく。
1954(昭和29)年	朝日新聞の記事に大きく取り上げられて有名になる。この後、次第に放浪から遠ざかり、画業に専念することになる。
1956(昭和31)年	東京・大丸百貨店で展覧会開催、約1ヶ月の会期中に80万人以上が来場。
1961(昭和36)年	初めての海外旅行で、ヨーロッパを中心に10ヶ国以上を約40日間で巡る。スケッチブックを持参し、帰国後に作品を制作、展覧会を開催。
1965(昭和40)年	「東海道五十三次」の構想を定め、取材と素描の制作を始める。これらのペンによる素描が遺作となる。
1971(昭和46)年	7月10日夜に脳溢血で倒れ、昏睡が続いた後、12日朝に逝去。その後、約3年にわたって大規模な回顧展が全国約50ヶ所で開催される。



■ 展覧会名

生誕100年 山下清展一百年目の大回想

■ 会期

2023年6月24日(土)～9月10日(日)

■ 会場

SOMPO美術館

〒160-8338 東京都新宿区西新宿1-26-1

■ 休館日

月曜日(ただし7月17日は開館)

■ 開館時間

午前10時から午後6時(最終入館は午後5時30分まで)

■ 観覧料

一般1,400(1,300)円、大学生1,100(1,000)円、高校生以下無料

※( )内は事前購入料金、事前購入券は4月27日(木)より販売予定、公式電子チケット「アソビュー!」、ローソンチケット、イープラス、チケットぴあなどでお買い求めいただけます。

詳細は美術館ホームページをご確認ください。

※身体障がい者手帳・療育手帳・精神障がい者保健福祉手帳を提示のご本人とその介助者1名は無料。被爆者健康手帳を提示の方はご本人のみ無料。

■ 主催

SOMPO美術館、朝日新聞社

■ 協賛

SOMPOホールディングス

■ 特別協力

損保ジャパン

■ 後援

TOKYO MX、新宿区

■ 協力

山下清作品管理事務所

■ 企画協力

ステップ・イースト

■ ホームページ

<https://www.sompo-museum.org/>

■ お問い合わせ

050-5541-8600(ハローダイヤル)

■ アクセス

新宿駅西口より徒歩5分



広報用貸出画像 15 《長岡の花火》1950(昭和25)年、貼絵、53×75cm、山下清作品管理事務所蔵

100th Anniversary of the Birth of  
**YAMASHITA**  
**KIYOSHI,**  
a Retrospective

プレスお問い合わせ

生誕100年山下清展 広報事務局(ウインドム内)

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-11 鴨下ビル2階

TEL:03-6661-9447 FAX:03-3664-3833 MAIL:sompo-m-pr@windam.co.jp